第7号
2015.07.31

西部浦高会通信

西部浦高会事務局
〒350-8790
川越市松江町1-12-7
seibuurako@yahoo.co.jp

浦高の思い出、楽音ウィルス（？）

高8回　小峯　賢

歳をとると、何ごとにも感興が湧かなくなる。ある人曰く～「これはあのDNAの4種類の信号が予め決めた老後だから当たり前だよ。性ホルモン分泌の衰えも関係するから、いまさら惚れたとかハレタ（？）とかの気分にはならないだろう？」～などと、話題を他へ転嫁する。とは言え、浦高のあの3年間の断片的な記憶には、老年の今になっても、淡いロマンの如きものを感じる。梁山泊もかくや、という雰囲気もあったあの男世界はやはり懐かしい。

小・中時代、山育ちの小生が洋楽を聴くには、ラジオから発する断片的な音声のみが頼りで、ピアノなる物を初めて間近に見たのも小学6年生の時（昭和24年）だった。かくなる身が音楽ファンらしき者になったのは、浦高の級友たちの影響だ。

その中の一人に、3年間を通して級友だったS君という男がいる。彼とはケンカ友たちで、遊び友だちだった。互いにカメラを所有して、写真談義を交わしたのが付き合いのきっかけだ。登山にも時々誘ってきて白馬も立山も一緒に登った。幾何が得意で絵も上手だった彼は、千葉大に進んで工業デザイナーになった。休み時間に、藤山一郎の叙情歌を愛でた小生を大いにバカにして、その場で、藤原義江のテノールをパロディ風に真似てみせ、本当の歌はこうだと自分から言って周囲を笑わせた。これが結構うまく、多少反発しながらも内心面白い男と思った。その後も折にふれては、我々なりの西洋音楽談義を交わしたものだ。かくしていつしか小生も西方の楽音に好んで耳を傾けるようになっていた。

そんな思いを決定的にしたのは、2年生の時、視聴覚教室で行われた当時珍しいレコードコンサートだった。主宰者は同期で秀才の誉れ高い緒方謙二郎さんである。彼は幼時からヴァイオリンを弾くなど音楽環境にも恵まれていたらしい。周知のように、後年、資源エネルギー庁長官や日中友好協会会長等の要職を歴任した人物だ。

卓上には3、4枚のLPが置かれていた。盛そば25円の当時、一枚の値段が3500円位だから家宝にもなる。その中の一枚であるトスカニーニ指揮・NBC交響楽団のドボルザーク「新世界」には圧倒されたものだ。この盤は、セル指揮・クリーヴランド管弦楽団の盤とともに、後年まで双璧とされたものだ。しかし演奏の質などわからないこの身を圧倒したのは、SN比と過渡特性の良い音質が奏でる西洋音楽の壮大さにあったと思う。ともあれ、以後「4番一塁川上」を神格化する如く、トスカニーニ・NBC響の名にとりつかれた。なけなしの小遣いで、彼ら演奏のSP盤4枚組の「田園」を買ったのはその表れだ。もとより手回し式蓄音機と鉄針の音質は泥んこ状態で、LPの楽音とは程遠く、そのうえ盤面を8回取り替えて聴く。しかし、宝でも手にした気分であった。

初めてオーケストラの生演奏に接したのは、ほかならぬ浦高創立60周年記念で来校した近衛管弦楽団である。昭和30年10月、3年生の時だ。50人編成位の規模で、指揮者は普段コンサートマスターをつとめるシュタフォンハーゲンだった。曲目はスッペの「軽騎兵序曲」とモーツァルトの交響曲第41番「ジュピター」である。アンコールもあったが、曲目の記憶はない。会場はこれまた記念事業で落成直後のあの蒲鉾形体育館だから、いかにも音が乾いていた。しかし、あの倍音豊かな弦楽器群のサクサクした音像が何とも新鮮に感じられた。生徒たちは「ジュピター」の楽章ごとに真面目で盛大な拍手を送っていた。さすがの浦高生も、当時はライブの経験がなく、演奏会の慣習を知らなかったとみえる。

ところで、当時三大指揮者とうたわれた巨匠たちのうち、フルトヴェングラーは2年生の時に故人となりトスカニーニとワルターは存命ではあったが、前者はすでに引退、後者は専ら録音活動に後退していた。しかし、セル、ミュンシュ等が米国で活躍し、欧州では巨匠ベームが君臨し、カラヤンが台頭していた。かくなる情報の多くは、図書館の雑誌類や級友たちとの雑談によるものだ。

大学に進んでからも浦高の余韻さめやらず東京労音に入会し、寮の仲間と月1回以上は演奏会に行った。

ソプラノの砂原美智子や大谷冽子（川越高女出身）が健在だった。テノールでは藤原義江もまだ現役だったが、五十嵐善芳がデビューした。ヴァイオリンでは諏訪根自子や辻久子も聴いた。指揮では渡辺暁雄やグルリットが登場し、岩城宏之はデビュー直後のホヤホヤだ。会場は日比谷公会堂、産経ホール、日本青年館等で、入場料はオペラが200円、他は100円代と学生向きだった。

教職についてから定年を経た現在まではオーディオ漬の時代だが、演奏会にも年2～3回は出かけてきた。中では、S38のベームが振る「第九」とH12の小澤～サイトウキネンによるマーラー「復活」が印象に残る。

最近は、音楽は聴くよりやるものだと称して、西部浦高会のH氏とカラオケにも行く。彼は演歌ならぬブラームスの信奉者だ。浦高の楽音ウィルスはこの身にとりついたままだ。

本文デザイン：S.Y.